

# すいたん農園プラン「生き物共生」で町おこし

—亀岡市保津町の取り組み—

京都学園大学バイオ環境学部 大西 信弘

## はじめに

この章で私は、生き物と共生する農園で仲間と野良仕事をし、他の生き物も共生できる安心な農作物を作りながら、土地の恵みを感じるという暮らしを提案したい。

水田と里山が日本の身近な自然だ。日本の農業が育む土地の恵みは、農作物だけでなく、日々、季節を告げる風景であり、ふるさとを思い出させる風土であり、そこで野良仕事を共にする仲間とのかかわり合いである。身近な環境を支えている農業が元気になれば、それに伴う様々なことが影響を受け、農に関わる暮らしをしている人たちが元気になるのではないか。

私のような都市の住人は、耕す土地も持たないし、土いじりも素人だ。土地の恵みに関わる暮らしといても、そう容易いことではない。そこで、生き物と共生する農園を舞台に、農業のプロフェッショナルたちに農を学ぶことで、土地の恵みを感じる暮らしを実践することの意味を考えてみたい。

## 1. 亀岡の農地の身近な自然

IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストに代表されるように、生物多様性の危機が指摘されて久しい。単に希少生物の保全が問題になっているだけでなく、日本では里山環境の保全などもボランティアの人たちによって進められている。人の住まない地域であれば保護区に設定したりすることで希少生物の保全が進むかもしれない。また、小規模な箱庭的な環境であればボランティアの人たちの活動によって環境をメンテナンスすることも出来るだろう。

しかし、現在、日本で盛んに進められているのは農業生態系の自然を保全する活動と言えるだろう。例えば天然記念物に指定されている大型鳥類を見ると、豊岡で再導入されているコウノトリ（写真1）、佐渡で再導入されているトキ、冬期に農地に出て餌を獲っているカムリワシ（写真2）など、どれも、農業生態系と深く結びついている。

亀岡で保全活動が進められている天然記念物のアユモドキ（写真3）も、その繁殖環境が地域の水田の灌漑と深く結びついている。日本の水田周辺で繁殖するナマズ、フ



写真1 冬期湛水田で餌をとるコウノトリ（兵庫県豊岡市、2007.2.17 撮影）



写真2 畑を耕すトラクターのそばで餌が出てくるのを待つカムリワシ（沖縄県石垣市、2009.1.16 撮影）

ナ類も産卵のために、一時的に湛水される水田や水路に入ってきて産卵する。ナマズ、フナ類は、繁殖期間が長いため、春から夏にかけて産卵が続く。しかし、アユモドキは、水田に水を入れる時期である6月上旬にしか産卵せず、水田灌漑に合わせてごく限られた期間に産卵している。このような一時的水域は、亀岡でもごく限られた場所に残っているだけである。おそらくは、水質汚染などよりも、このような生活史の様々なステージを完結するための環境、そしてその繋がりが失われることで生物が生活できない環境となってきたと考えられる。

春になると、水田にはたくさんのオタマジャクシをみることができる。亀岡には、両生類研究者もおどろくほどのカエルが棲息している。日本のカエルの主な生息場所は、水田なのだが、やはり、環境の変化に伴って生息しているカエルも激減している。カエルの中では、ナゴヤダルマガエルが生息していることを大事にして地域おこしをしている地域がいくつかある。ナゴヤダルマガエルは、環境省レッドリストで絶滅危惧IB類に指定されている種であることが、その後押しになっているのだろう。亀岡にも、ナゴヤダルマガエル（写真4）が生息しているが、今のところあまり注視されていない。他にも、トノサマガエル、シュレーゲルアオガエル、ヌマガエル、ツチガエル、アマガエルなどを水田や畦、小溝で見ることができる。ナゴヤダルマガエルが絶滅危惧IB類であるだけでなく、これだけ様々なカエルが共存できる水田生態系のポテンシャルは価値あるものだ。

鳥類でもケリ、ヒバリが水田を繁殖場所として利用している。ケリは、4月～6月、水田に水が入る前に産卵し雛を育てる。ケリの雛は生まれてすぐに歩くことができる（写真5）ので、水田の準備



写真3 亀岡のアユモドキ。ドジョウ科に属するように、吻端に3対のヒゲがある（亀岡市、2008.10.12撮影）



写真4 稲藁で越冬に備えるナゴヤダルマガエル（亀岡市、2008.10.30撮影）



写真5 田植え前の水田で育つケリの雛（亀岡市、2008.5.16撮影）



写真6 上空から威嚇するケリ（亀岡市、2008.5.11撮影）



がされる中、餌をとりながら成長していく。雛がうろうろしているそばで両親が交代で雛の保護をしている。保護中のケリは、人やハシボソガラスが近づくと、けたたましい声で鳴きながら威嚇する（写真6）。それを知っている者にとってみれば、威嚇していることで雛を保護中であることがわかるのだが、とにかくけたたましい。ヒバリは、春先に大麦を栽培している畑でよくみかけるので、大麦畑の中で繁殖しているようだ。ヒバリも、繁殖期には上空に上りホバリングして独特なさえずりをする。春から夏にかけての音の景観なのではないだろうか。

先にあげたように、水田周辺には、魚類、両生類が豊富に棲息している。また、普段はあまり見かけないが、ネズミの類も農地に暮らしている。そうすると、これらを餌とする鳥類が生息することができるようになる。普段、見かける最も大きな鳥は、サギの類だろう。水田には、ダイサギ（写真7）、チュウサギ、アオサギ、アマサギが、周辺の小河川にはコサギ、ゴイサギ（写真8）がみられる。一部は、年中亀岡で見かけるので、留鳥かもしれないが、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギなどは渡り鳥で、夏になると渡ってくる。チュウサギは、環境省レッドリストで、準絶滅危惧に指定されている。チュウサギ（写真9）は、カエル類、ドジョウ、ザリガニ、淡水魚などを餌とするため、これらの餌生物がいなくなると姿を消すと言われている（藤岡、1998）。冬期に渡ってくる水田の高次捕食者として、チョウゲンボウ（写真10）、ノスリ（写真11）もあげておこう。どちらも、越冬場所として亀岡の水田や河川敷を利用している。地元のバードウォッチャーによれば、以前は、コミミズクも渡ってきていたというが、現在はその姿を見ることはできないようだ。チョウゲンボウも、ノスリも、昆虫、カエル、小型ほ乳類などを補食する。もう一種、高次の捕食者にカワウがいる。カワウがくると、ハヤ（オイカワ）がいなくなると地元の人たちに思われている。琵琶湖でも、アユの食害で問題になっているが、生き物が残っている地域に様々な捕食者が集まってしまうのも今後の問題点となるだろう。

身近な大型ほ乳類を見てみても、シカ、イノシシといった獣害をもたらしているほ乳類は、里山に暮らしているからこそ、里に下りてきて農業害獣となっている。2011年には、京都学園大学の近くでもツキノワグマが出たということで、学内に注意を促す掲示がなされた。



写真7 カエルをとらえるダイサギ  
(亀岡市、2007.6.10 撮影)



写真8 大きなオイカワをとらえたゴイサギ  
(亀岡市、2007.6.10 撮影)



写真9 チュウサギ。亀岡で最も多いサギだろう。環境教室で観察会をしたときに、準絶滅危惧に指定されていることを話したら、いずれコウノトリのようになるかもしれませんねと言われたことがある。  
(亀岡市、2008.7.6 撮影)

日本の里の自然とでも表現したらいいのだろうか、こうした様々な生き物たちが暮らしている里の農地と里山は、日本の田舎の大部分といってもよいほどの面積を占める。今、日本の農地があるのは、先達が生きるために開墾、利用してきた土地であって、人が手を入れずに維持できるものではない。そして、これは、プロフェッショナルな農家や林業家の人たちが維持してきたものであって、私たち素人が休日のボランティアで維持できるようなものではないだろう。

亀岡の豊かな自然は、農業と共にある自然といえるだろう。現在、京野菜も亀岡産の野菜がたくさんあることが知られている。また、南丹地域は、現在、約6割の食料自給率を達成しており、国内の食料自給率が4割を切るなかで、屈指の農業地帯といえる。亀岡には、古く平安時代には荘園が広がっており、学園大学の住所、南条も条里制水田の名残だという。古くから、現在まで、高い生産性を維持してきた農業地帯が亀岡である。この高い生産性と、生物多様性が共存してきたのが、亀岡の農業と自然といえるだろう。



写真 10 9月、秋とともに渡ってきたチヨウゲンボウ。渡りの途中で京都学園大学に立ち寄ったようだ  
(亀岡市、2008.9.26 撮影)

写真 11 冬になるとぼつぼつと渡ってきて越冬するノスリ  
(亀岡市、2008.1.16 撮影)。

## 2. 生き物と共生する農業

生き物と共生する農業という考え方自体は、既に良く知られた考え方だろう。1998年に、農林水産省農業環境技術研究所編で「水田生態系における生物多様性」という書籍が出版され、その中で、西尾は、次の様に述べている。

農業環境で生物多様性を検討するねらいとして、「農業・農村における生物多様性保全の研究を強化することは、EUと協調していく上で、また、日本において環境と調和した新たな農業技術を今後構築していく上でも必要である。」

それを実現するための枠組みとして、以下の7項目が挙げられている。

- ①農業生産に直接関係する生物だけでなく、広い価値観で多様な生物を評価する。
- ②圃場に加え、農道、水路、堆肥材料収集に利用した林・入会地、屋敷林などの農村の各種構成要素を含む二次的自然環境である農業生態系での生息域内保全を対象とする。

- ③生物多様性の保全には生物の生息地の長期維持が不可欠である意味から、日本に定着していた伝統的農業が日本の生物多様性にどのように貢献したのかを明らかにする。
- ④その上で、最近の集約農業が生物多様性をいかに損なったかを明らかにする。
- ⑤これらを踏まえ、農業生産と生物多様性保全との調和を図る技術改善や施策を提言する。
- ⑥日本の伝統的基幹農業は水田であり、国際的にも水田農業の環境便益を説明してきた経緯から、まず水田農業における生物多様性保全から着手する。
- ⑦遺伝子操作生物の安全性確保問題もあるが、当面、野生生物の生物多様性を対象とする。

これを現実に実践している事例として有名なのは、兵庫県豊岡市での取り組みではないだろうか。皆さんご存知の様に、兵庫県豊岡市ではコウノトリの再導入が行われている。兵庫県では、昭和38年に当時の県知事がコウノトリの人工増殖を決定、昭和40年にコウノトリ飼育場が開設されるものの、昭和46年に日本にいたコウノトリの個体群が絶滅してしまう。昭和60年に旧ソビエト連邦から幼鳥を譲り受け、保護・増殖事業が順調に進み、平成14年にはコウノトリや生復帰推進協議会が開催され、平成17年から、試験放鳥が始まる。現在、飼育個体95個体（平成24年2月22日）、野外にいる個体48個体（平成23年9月24日）にまで増えている。

豊岡の面白いところは、コウノトリの郷公園の保全活動とは別に、地元が様々に活動しているところだろう。兵庫県但馬県民局地域振興部豊岡農業改良普及センターは、平成14年から、コウノトリプロジェクトチームを結成し、コウノトリ育む農法（平成17年命名）の推進計画を検討しはじめる。平成15年からコウノトリと共生する水田自然再生事業が始まり、時間をかけてコウノトリとの共生の準備がなされた。平成17年には「コウノトリ育むお米生産部会」の準備委員会が発足し、豊岡市全域で「コウノトリ育む農法」を推進、ひょうご食品認証制度推進事業が始まる。

兵庫県認定食品として、ひょうご安心ブランドが制定され、『1、人と環境に安心な栽培方法で育てました、2、検査により安心を確認しています、3、安心がみえます』の3点を掲げ、コウノトリ育むお米として、700～900円/kg程度で販売されている。250円/kgを割り込もうかという米価の現状にあって、このような付加価値が支持されていることは注目に値するであろう。

兵庫県但馬県民局地域振興部豊岡農業改良普及センターが平成18年に作成したコウノトリ育む農法のパンフレットには、生き物と共生する価値について、次の様に問いかけている。

「ただ農薬や化学肥料の削減というだけでなく、水田で安全安心なおいしいお米と生き物を同時に育むという要素と、この農法を通して、コウノトリも棲める豊かな、文化、地域、環境づくりを目指していきます。さらにこの農法の広がりと共に、コウノトリが水田で安心して餌を啄ばむことのできる風景の意味を、農業者や県民が共に共有できることを願っています。コウノトリが安心して餌を啄ばむ水田で、様々な命を育み互いに命を分け合いながら、国民の命の糧であるお米を栽培し、そのお米を食べた県民は健康に暮らす……お米を作る人と食べる人が互いの立場を理解し支えあう地域で、地域文化や環境を守り育て、未来に継承していくことを目指します。」

ここでも生き物と共生する農業を通じて地域の風土が作られ、地域のコミュニティが意味を持ち、他の生き物も共生できる安心な農作物を作りながら土地の恵みに支えられる暮らしが提案されている。

### 3. 保津の思い

保津町自治会は、平成 19 年に「大家族のまち保津町」を宣言した。その内容は、次の通りである。

「私たち保津町民は、清らかな保津川の流れ、豊かな自然とともに、歴史と伝統文化を育んできました。水と緑の恵みは、人々に生きる喜びをあたえ、まちの発展の礎となってきました。永い歴史の中においては、保津川は、時には水害という厳しい試練をわたしたちに与えました。その災害から、わたしたちは、互助精神が芽生え、友情とお互いの絆が強まり、生きる勇気となっています。これはまさに家族の絆です。ふるさとの匂いの残るまち保津町。豊かな自然環境、歴史と伝統文化を大切にし、誰もが安全で安心して暮らせる町づくりを次世代に伝えていかなければなりません。わたしたち保津町民は、心の通いあう家族です。いま出会えたあなた、今日からわたしたちの家族です。こうして世界中の人々と家族になることができれば、世界平和と繁栄は永遠に続くことでしょう。」

こうした保津町全体に活力を入れていこうという活動は、それ以前から行われており、平成 14 年 4 月には、保津町まちづくりビジョン推進委員会議を設置し、ふるさと保津を考える会、亀岡駅北開発を考える会、保津川の河川敷の利用を考える会などで、保津町の活性化について話し合いがもたれ、平成 16 年 1 月「ふるさと・保津・夢ナビゲーション」を提言している。平成 19 年 9 月には、「亀岡駅北地区まちづくりワークショップ」を開催し、4 回のワークショップで、まちづくりのコンセプト「文化の香る、水と緑と華やぎの“まち”」及びゾーニングプランをまとめ、これを地権者組合に引き継ぎ、JR の複線化に伴って新たにできた亀岡駅北口周辺のまちづくりコンセプトを協議してきた。

駅北地区開発プランの検討と平行して、対岸の圃場整備後の圃場（八ノ坪地区）の活用を検討し、平成 20 年 7 月「かわまちづくり 保津川すいたん農園プラン」で、「生きもの共生」をコンセプトとした農業公園で、人と自然、人と人との交流の場づくり、新しい地域産品づくりを提案し、徐々に保津の中で活動が広がっていった。この他にも農事組合法人ほづの設立など、農業を中心としたまちおこしが評価され、平成 21 年度に豊かなむらづくりで、農林水産大臣賞を受賞している。

今（平成 24 年 2 月）、保津川すいたん農園プラン／産品生産チームのメンバーが、NPO 法人を立ち上げ、さらに活動の幅を広げようとしている。

### 4. かわまちづくり、「生きもの共生」で町おこし：「保津川すいたん農園プラン」

こうした保津の思いを実現するために行われている保津川すいたん農園プランを紹介しよう。すいたんという言葉は聞き慣れないだろうが、水端、好いたん、などの言葉をかけた造語だ。パンフレットの表紙には、次のようなコンセプトが掲げられている。

「水端（すいたん）」とは、扇状地をくぐる地下水が川の岸辺で湧き上がる場所。

「水端（すいたん）農園」とは、保津川の岸辺の水に浮かぶ緑の田畑。

ここを命の源である食材の箱舟に。生きものと人、人と人との交流の場に。

“水と生きものの豊かな故郷（さと）”

“絆と出会いの町保津”



このコンセプトを実現するために、以下に挙げる保津町の3つの資源を活用していく方針がとられている。

①自然：豊かな水と生物多様性

峡谷の入口、水系の合流点にあり、変化に富んだ河川群、それによって育まれた豊かで多様な生物群が存在します。大都市圏に隣接する地域では極めてまれです。

②歴史：大都市近郊の地産地消の地、京都の名勝地

遠く弥生時代にさかのぼる水田耕作の歴史があり、資源循環型農業が長らく営まれてきました。また、地元の「保津川遊船」「トロッコ列車」は年間100万人が訪れる京都の観光拠点です。

③ひと：保津町のひとのつながりと地元大学の存在

住民自治の経験豊かな保津町民の持つポテンシャルは際立ったものがあります。バイオ環境学部を有する京都学園大学の学生と村びとの協働は、新しい町づくりのモデルとなるものです。



図1 保津町自治会のパンフレットに描かれた八ノ坪の水端（すいたん）農園プランの未来予想図（まだまだアイデアがいっぱいあるので、これからを楽しみにしてください。）

保津の農業文化が育んできた自然を活かしたまちづくり、保津の資源を活かすという思いを込めサブタイトルに、『かわまちづくり、「生きもの共生」で町おこし』とつけられている（図1）。

また、かわまちづくりとは、現在、京都府と亀岡市ですすめられている施策である。京都府と亀岡市では、川をいかしたまちづくり、まちをいかした川づくりを推進していくための「保津川かわまちづくり計画」を策定することとし、策定にあたり、河川、自然環境、地域振興、市民協働等の観点から幅広く意見を聴くことを目的に、有識者等からなる検討委員会や市民団体等との意見交換会を開催

し検討を進め、「保津川かわまちづくり計画」が取りまとめられた。今後はこの計画に基づき、様々な主体と連携・協働しながら、かわまちづくりが推進されてゆく予定である。

具体的には、

テーマ 1. 保津川の岸辺に「生きもの共生」の農業公園を作り、地産地消型の新たなアウトドアライフの提案、都市と農村の交流をすすめましょう。

テーマ 2. そこで、「生きもの共生」（生物多様性保全型農業）を特色とした、新しいふるさと産品を育てましょう。

というテーマを設定して、「生きもの共生」で町おこしを実現していこうとしている。

現在、かわまちづくりは、亀岡市が取りまとめ役として次の5つのワーキンググループ（WG）が組織され、プランの検討が行われている。

- 1) 水端かわまちづくり WG
- 2) ふれあいかわまちづくり WG
- 3) にぎわい拠点整備 WG
- 4) 歴史・文化・自然再生 WG
- 5) 環境保全情報発信 WG

すいたん農園プランは、ひとつのWGとして行政にも認知されている。それどころか、住民主導でまちおこしプランの検討を進めてきたことが大きく評価されて、保津川かわまちづくりのモデル地区に選定されるほどだ。水端かわまちづくりWGが担当するのは、すいたん農園が広がる保津の八ノ坪の圃場整備された農地と保津川に挟まれた河川敷の利活用についてだ。八ノ坪は、以前は河川敷まで全て水田だった。洪水が起きればもちろん全て流されていた。しかし、同時に土壌は肥沃で、魚が豊かに生息する場所で、「じゃこ田」と呼ばれ水田漁労の場でもあったし、現在は消滅したアユモドキの生息場所でもあった。これにちなんで「じゃこ田ミュージアム」とこの地域を呼び、水につかれれば流されてしまうかもしれないが、河川敷で水田を開き、保津が戦ってきた洪水の歴史を学ぶ地域として、そして、河川に近い水田を淡水魚の繁殖場所として活用し保津の農業文化が育んできた自然を学ぶ地域としていこうとしている。

圃場整備の入った八ノ坪は、農園として、現在、農業塾が開かれ

京都新聞社  
The Kyoto Shimbun Co., Ltd.

ニュース

### 「竹炭農法」で野菜・果物を栽培 亀岡で体験塾開塾

環境に優しい農法で野菜や果物を栽培する「農業体験塾」の開塾式が9日、亀岡市保津町の農園で行われた。参加者は熱心に農作業に取り組んだ。

同町自治会が農業の入門編として初めて実施した。二酸化炭素の削減につながる竹炭を埋め込んだ農地で、半年かけて「クールベジタブル」（地球を冷やす野菜）を育てる。

市内や京都市などから7組14人が参加した。参加者は自己紹介の後、地元で有機栽培の普及に取り組む松實能文さん（53）の指導を受けながら、ネギや白菜など6種の野菜を植え



竹炭を埋め込んだ農地で、野菜の苗を植える農業体験塾の参加者たち（亀岡市保津町）

写真記事 1 京都新聞に掲載された農業塾の様子。

（2011年10月10日、

<http://www.kyoto-np.co.jp/sightseeing/article/20111010000025>）



ている（写真記事 1）。残念ながら、初回の農業塾は、準備不足とスタッフの経験不足から、作物の育ちが悪く、農業塾としては残念な結果になっている。失敗の要因として、農業のプロフェッショナルである農家の人たちの持っている知恵、技術をうまく活かしきれなかったことだ。

農園にしても、产品生产にしても、Yさんの「ばあさんの小遣いかせぎ」から始めるというアイデアを見失って、雇用の難しさにとらわれていたきらいがある。土いじりの素人である都市住民が、プロ農家（もしくは家庭菜園マイスター）たちの指導のもと、土地の恵みを実感するという視点を忘れてはならない。

私は保津で農業塾の企画もしながら一塾生でもある。作物の収穫、農業塾として至らないこともいろいろあったものの、土をいじり、土地の恵みを直接に受ける暮らしをして、さまざまなことを学ぶことができた。いくつか列挙しよう。

- 1) 土地の恵みで生きていることを実感できたことは、土地なしの都市のサラリーマン家庭で育った私には大きな経験だった。ごま粒の半分もないようなネギの種をまき、それがだんだんと成長して、今は 10cm 程度のネギのミニチュアになっている。秋には、ネギとして収穫できる予定だが、あの小さな種がネギになっていく過程を見ることで、植物も生き物であることを心底実感した。生物学を教える身ではずかしい話だが、生き物を食べているということと改めて向き合ったように思う。
- 2) 農業は一人でやるにはあまりにつらいものだと思った。草引き、鍬仕事などの作業を、一人で、広い畑で作業していたら、どれだけ切なく感じただろうか。塾生と一緒に、世間話をしながら、草を引いていく。これはものすごく大事なことだった。
- 3) 2) とも関連するが、こうした土いじりをする中で、仲間意識ができていくことだ。一緒に野良仕事をした仲間は、なんだか信用できるような気がする。また、今回、小学生から、年配の方まで、様々な年齢の塾生がいたのだけれど、子どもも大人もいるというのは、大事なことだと感じた。
- 4) 土地の恵みはおいしい。私は趣味で魚料理をする。魚というと、皆、生臭いと思いがちだが、生臭いのは、生臭くなってしまった素材だからで、鮮度を保っていれば臭みなどなくおいしい。都市住民の私は、流通している野菜がスタンダードな野菜と思って暮らしてきた。しかし、野菜も、鮮度が大事で、新鮮な野菜はほんとうにおいしい。甘くておいしい。間引いた野菜も、間引き菜の若い野菜の味が新鮮だった。ある塾生の方のお話では、お子さんはここで収穫された春菊なら喜んで食べられるそうで、取り合いになるほどだそうだ。おいしい土地の恵みを食べて毎日を過ごすという豊かさが、このような暮らしにはあると思う。
- 5) 保津町の暮らしの知恵を学ぶ。Yさんのお母さんには、お漬け物をもらったり、ゆずを使った料理の仕方を教わったり、生活の知恵を授かった。親兄弟と離れて核家族をしている都市生活者には、こうしたおばあちゃんの知恵が伝わる機会がない。塾生からも、食べ方を知りたいという声があったが、生活の知恵を伝える仕組みとしても、農業塾は面白いと思う。
- 6) 畑の生き物について。小学生の塾生はカエルを捕まえたり、成虫越冬しているテントウムシをみつけてよるこんだり水を汲んだじょうろに小魚が入ったのを捕まえたりと、いろんな生き物に興味津々だった。私自身、カヤネズミをみつけたりして、生き物好きの私としては、そうした生き物に出会えるだけでうれしい体験であった。こうした生き物がいることが、食の安心につながっている。生き物好きとしてあえて、そうした生き物がいるということが楽しい、そう思う人

間がいるということを強調しておきたい。

農業塾を半年ほどやっただけで、これだけの経験をすることができる。塾生それぞれに、いろいろな経験をしていると思うと、改めてすいたん農園プランが創出するものが重要に思えてくる。冒頭でも書いたように、生き物と共生する農園を通じて、仲間と野良仕事をして、他の生き物も共生できる安心な農作物を作りながら、土地の恵みを感じるという暮らしを提案したい。

## 5. 私が保津町で活動している理由

平成17年に、保津川開削400周年記念事業として亀岡市で様々なイベントが行われた。京都学園大学では「フォーラム保津川」が開催され、「小盆地宇宙かめおか 水環境エコミュージアム」というセッションと「まちづくりを育む：保津川の可能性を探る」に参加させてもらった。私が参加していたくらいだから、保津川に関わる様々な人が集まる機会となり、このときに出来た人のネットワークが、後のNPO法人プロジェクト保津川や、保津川を世界遺産に登録をめざす会、木造船復活（もともと保津川下りは木造船で行っていた）、筏復活などの取り組みを起し、現在の亀岡を盛り上げている。

私は、プロジェクト保津川に参加していたのだが、そこでNさんと出会い、Nさんの紹介で、保津の住民でもないのにも関わらず、「亀岡駅北地区まちづくりワークショップ」に参加させてもらいはじめた。やがて、YさんやMさんらと、夜更けのファミレスで、1杯のコーヒーを飲みながら、保津の自然の豊かさを活かして何か出来ないだろうかというような話をするようになっていった。時には、終電を逃して京都市内までNさんに送ってもらったこともある。そうこうする中で、Yさんが、さまざまな話をまとめて、保津川すいたん農園プランを作り上げた。この段階では、まだ、一部の人たちが夢を語っているに過ぎない状態だったが、自治会にプランを提案して、NPOの設立にまで発展していった。

こうした経緯を一般化するのは難しいのだが、「よそ者」に寛容というか、「よそ者」を排除しないというか、そういうような保津の気風が、様々な人を巻き込む状況を支えているのではないだろうか。また、自分たちのまちを元気にしていきたいという尽きない思いが、よそ者を巻き込んでまちおこしを続ける原動力なのではないだろうか。保津町の豊かな人材が、保津の保津らしさであるのは確かだ。

## 参考文献

農林水産省農業環境技術研究所編 1998『水田生態系における生物多様性』

兵庫県但馬県民局地域振興部豊岡農業改良普及センター 2006「兵庫県立コウノトリの郷公園 保護増殖の歴史 コウノトリ育む農法」(<http://www.stork.u-hyogo.ac.jp/chronol/index.php>)

藤岡正博 1998「水田生態系における湿地性鳥類の多様性」『農林水産省農業環境技術研究所編 水田生態系における生物多様性 養賢堂』: 63-82

保津町自治会 2011「大家族宣言の町」(<http://homepage3.nifty.com/hozutyoutitikai/>)

保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進委員会 2010「すいたん農園プランパンフレット」

IUCN 2011“The IUCN Red List of Threatened Species”(http://www.iucnredlist.org/)